法華宗寺院と中世京都の町

五島邦治

天文元～五年（一五三二～六）に京都で起こった天文法華一揆は、京都周辺の一向一揆に対抗して起こったもので、宗教一揆であると同時に、京都居住の商工業民を中心とする都市民の自治の高まりとして理解されてきた。しかし近時の研究は、①一揆の中に法華宗とは結びつかない動きがみられる、②三好氏等の武家勢力に法華宗徒が利用された感が強い、③町組が成立する場所と法華宗寺院の場所とが一致しない、といった問題点から、上述の法華一揆と都市民の自治との安易な関連付けには否定的である。そこでここでは、天文法華一揆に至る前提として、法華宗を受け入れた京の町のあり方と、法華宗寺院が町の自治に寄与できた可能性について、法華宗寺院の具体的な存在形態を通じていささか考察を加えたい。

京都の町に自治を確立しようとした主体として「町衆」という言葉が人口に膾炙されている。しかし、実際には天文法華一揆以前にこの言葉はなく、それに代るものとして史料的にはもっぱら「町人」という言葉が使われた。彼ら「町人」は、元来町小路に居住し、寺社の寄人・神人や本所の被管人として商工業に従事する特権的な身分階級であった。たとえば『看聞御記』によると永享九年（一四三七）正月に、三条町・六角町の「町人」が室町幕府に召されて松囃子を催すことがあった。しかしこの同じ事件を記した『東寺執行日記』では、その「町人」のことを「糸座・コウ（紺）ノ座・生ウヲ（魚）ノ座」とよび、彼らが実際は商業座の座人であったことを示している。三条町といえば祇園社の神人として知られた綿本座があり、六角町にも同様に御厨子所生魚供御人がいたことは周知の事実であるが、そうしてみれば彼らは「町人」という一見地縁的な形態を想像させる呼称をもちながら、その実は身分的な社会集団の構成員の、重層的な寄り集まりであったことがわかる。つまり本来的に強力な地縁共同体を形成する契機には欠けていたことになる。

しかし、といってもまったく京都に地縁共同体が展開していなかったわけではない。おそらくそれは、すでに早くから成立していた、下京では祇園・稲荷、上京では御霊といった神社の祭礼に奉仕する組織を基礎としたものであったろうが、その代表的な祇園会の場合を例にとれば、京中の町から出る山鉾と同時に「山崎之定鉾、大舎人之鵲鉾」といった山崎油座神人、大舎人座などの商業座を基盤とするものもあったことを考え合わせると、山鉾を出した京中町の祭礼奉仕組織も実際には純粋に地縁共同体であったと考えるにはまだ検討の余地がある。

同じ頃、京都の町は、周辺から徳政を目的として頻発する土一揆の乱入に悩まされていた。土一揆の直接目指すところは酒屋・土倉とよばれる金融業者であったが、徳政の実施は商業ルールそのものを破壊したから、土一揆の勃発はひとり酒屋・土倉に限らず、さまざまの商業に従事する「町人」全般の生活を脅かすことになった。その意味で広く「町人」は利害を共にしていたといえよう。したがって周辺部からの土一揆に備えて、「町人」たちには地縁共同体を結束することが要請されていたわけである。事実、管領細川の被管人や政所頭人の伊勢氏に率いられた「土倉質屋之

輩」「町人并土倉方」が土一揆衆を撃退しているのだが、その軍勢の組織はといえば、室町幕府における酒屋・土倉の支配構造とまったく同じであった。すなわち土一揆に対処して要請されている結束の方法には、やはり上述の身分的な組織集団の力が働いているわけであって、地縁的な共同体が十分に成熟していないようすがうかがえる。地縁共同体が成熟の方向に向かいつつあったのは事実といえ、やはり小地域に限定され、京都全体としてはまだまだ社会集団の身分的な原理が働いていたといえよう。

こうした京都の状況の中に、法華宗は教線を開いていったのであって、その布教対象が上述の商工業民すなわち「町人」であったことはいわれているとおりである。たとえば京都にはじめて入った日像は、五条坊門の柳酒屋とよばれた中興氏、また妙覚寺を開いた日実は四条大宮の小野妙覚、妙満寺を開いた日什は天王寺屋通妙と、それぞれ有力商人の支持を得て布教活動を展開したといわれている。しかしこうした有力檀越には、その個人的な経済力が期待されたのであって、そうした個々の檀越の背景に広く地縁的な共同体を想定するのはほとんど不可能といわねばならない。

いま下京は大宮の綾小路五条坊門間にあった日応の妙蓮寺を例に、寺院とその周辺地域さらに京都の町全体との関連を考えてみることにしよう。この近辺に住んでいた壬生晴富の日記によると、妙蓮寺本坊を取り囲んで多くの子院・坊があり、応仁の乱中にはこれらが堀に仕切られた構えに囲まれていた。そしてその内部は法華宗寺院の支配下にあった。寺院の運営は評定衆とよばれる僧侶たちが関与したらしいが、その他に有力な「町人」が檀那衆として経済的な支援を行ない、また寺院の運営にも発言力をもって危急の際にはいち早く駆けつける軍事力ともなった。

この妙蓮寺のあった四条大宮付近一帯は、妙覚寺・妙本寺・妙満寺・立本寺と多くの法華宗寺院が軒を並べた独特の景観をもっていた。応永二十四年（一四一七）、この近辺で敵討のため法華宗の僧侶が殺され、町より「在家人」が出会って追手二人を侍所に渡した、という事件があった。この記事は「町衆」の自治の展開の初期史料としてよく知られたものであるが、先述したように付近が法華宗寺院の建ち並んだ独自の景観をなしていたことを考えるとき、単純に町の自治の発展という論旨の中では考えられないように思う。法華宗寺院の支配下にあった地域であることを一応考慮に入れておく必要があるだろう。

しかし妙蓮寺の檀那衆として晴富の日記にみえる中興加賀入道とともに、「上辺俗人若衆」が下京のこの寺を訪れていることで端的にわかるように、法華宗寺院を支持した檀那衆は、寺院の所在地にかかわらず広く京都の町のあちこちに散在して居住したのである。法華宗寺院は各門派の自律性が強かったが、そうした門派が京中の有力商業民を奪い合って檀那とする、という状況であった。先に述べたように、こうした商工業民は本質的に身分的な社会集団の構成員であったから、法華宗寺院が直接地縁的な共同体とのかかわりをもつことはできなかったと思われる。

考えられるのは寺院が檀那衆を通して、その背景に成熟しつつあった地縁共同体と結びついた、ということである。天文法華一揆の乱で、『祇園執行日記』は「下京・上京ノ日蓮宗、町人ヲ引催」と記しているが、法華宗寺院がそうした地縁共同体を指導する形で一揆が展開した、とみるのが真相に近いのではないか。